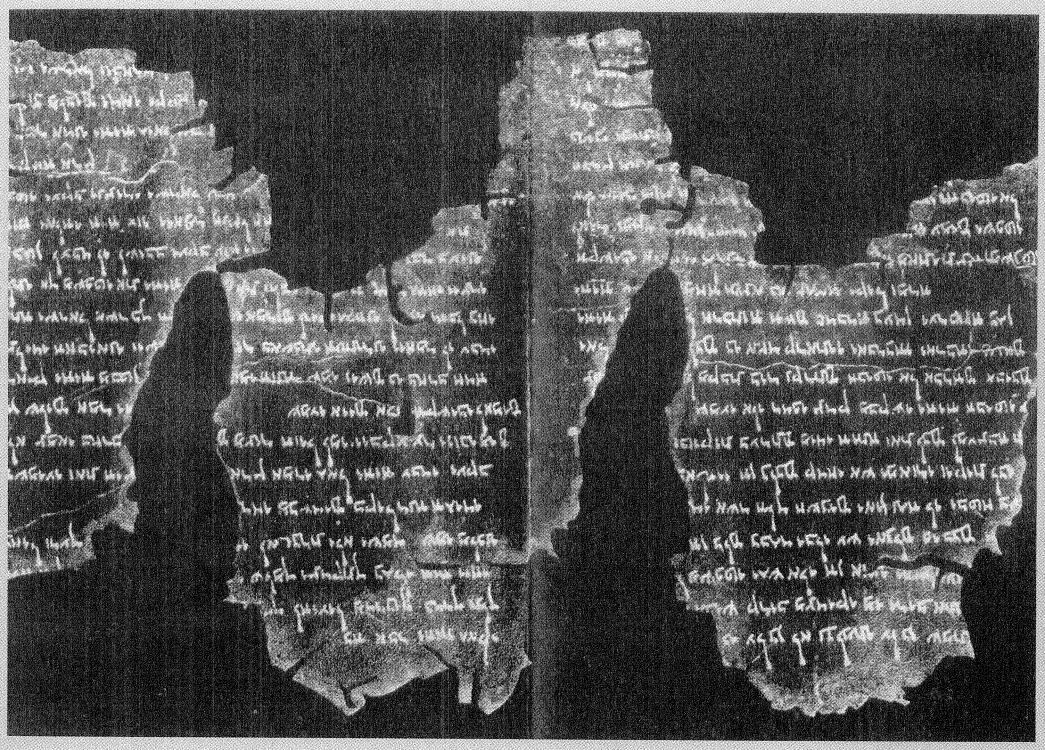
論集

本文批評と解釈



平成10年度～14年度 文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究(A)118
「古典学の再構築」研究成果報告集Ⅲ

A02「本文批評と解釈」班研究報告

Ⅲ

神戸 平成15年3月

「実例」とは，普通の人と学者とがそのことに関しては理解を同じくするようなものである。（服部正明和訳「論証学入門」p.368，『世界の名著』1所収）

『ニヤーヤ・スートラ』に対しては，パクシラスヴァーミン（＝ヴァーツヤーヤナ　後4－5世紀）の『ニヤーヤ・バーシャ』以前に複数の注釈が存在したことが知られているが，残念ながら現存しない。上のテキストをパクシラスヴァーミンは，次のように注釈する。

世人一般をこえ出ていない人が，「普通の人」である。生得の，あるいは習得による，とくにすぐれた理解力をもっていない人である。

その反対の人が「学者」である。彼ら（学者）は，「吟味」（タルカ）により，「知識手段」によって，対象を考察することができる。

ある事柄を，普通の人が理解するのと同じように学者も理解するとき，その事柄が「実例」である。

実に，「実例」との矛盾（を指摘すること）によって，反主張が否定されるべきであり，「実例」と符合させることによって自己の主張が確立されるべきである。そして，（「実例」は）五支分（をもって構成される論証式）においては，「喩例」の役割をはたす。（服部和訳，pp.368-9）

根本テキスト中の各語が逐一解説されており，被定義項目である「実例」の意義と役割が明示されている。『ニヤーヤ・バーシャ』に対して，ウッディヨータカラ（6世紀）は復注『ニヤーヤ・ヴァールティカ』を著し，それに対してヴァーチャスパティ（9－10世紀）は復復注『ニヤーヤ・ヴァールティカ・タートパリヤ・ティーカー』を著している。さらに，ウダヤナ（10－11世紀）は『パリシュッディ』と呼ばれる復復復注を著している。同様の現象は，仏教やジャイナ教の文献についても見られ，注釈にさらに注釈を重ねていく「本文解釈」の伝統は，インドにおいて広く見受けられるものである。

インドにおける本文批評と解釈の特色を具体的に見るために，まず正統バラモン教を代表するヴェーダ文献について，後藤敏文の「ヴェーダ文献の原典・伝承と研究・解釈」と吉水清孝の「ミーマーンサー学派のテキスト解釈法」を提示する。次に，インドにおける異端の伝統を代表して，桂紹隆が「インド仏教の原典・伝承・解釈」を紹介し，最後に「インド古典学における本文批評と解釈の方法論」について述べる。

ヴェーダ文献の原典・伝承と研究・解釈

後藤　敏文

1　ヴェーダ

「ヴェーダ」は古代インドの祭官たちが護持した文献を固定し伝承したものである。それらのテキストは，彼らが社会全体に負う職業的役割を実行するのに必要な手段・道具であり，誤りなく受け継ぎ，実行されねばならないと考えられていた。「ヴェーダ」の語自体は「知っている」を意味する動詞からの派生語で，「（ものを実現する）知識，聖典」ほどの意味かと思われる。

祭官階級の文献という性格から，祭式を内容とすることはいうまでもない。ここでは，「祭儀，祭犠，祭祀」などの語に比べ，あまり一般的でない「祭式」の語を用いることにする。つまり，それらは，一連の祭礼用の詩句と行作とが必然的にもたらす個々の結果の上に成果が総合的に構築される，という観念を基礎にしており，そのメカニズムに対する信念のもとに，「祭り」というよりは，一連のoperationとして構成され，論じられている。ヴェーダ祭式は，神の配慮にすがる祈りの営為ではなく，宇宙の理法（リタ）に関する知識に基き，言葉の力によって自然界・人間界を操作するメカニズムと捕らえられる。最古のリグヴェーダ讃歌においても神々と祭主・祭官との間には，厳しい取引，契約の観念があり，願望ではなく意志や命令を表す動詞形を用いて神々へ呼びかるのが原則となっている。また，祭式文献の背後には，古い時代に，祭官階級が祭式を越えて文献一般（ことばによる営みのすべて）を管理していたことを窺わせる事情も散見される。断片的言及は，法律，天文，医学など，太古の「学問」全般に及んでいるが，当時の「世界理解の学」の全知全能を動員して祭式を構築し，理論化した跡が窺える。ただし，手工業，商業，農牧業の実際については，直接の関与の跡が薄い。

古代の西方世界の事情と情報交流の存在とを考慮すると（西北インドの扉は常に開かれていた），インド

でも早くから文字の使用が可能であった筈である。しかし，文字の使用は前3世紀のアショーカ王碑文まで見られず，これも含めて，世俗の範囲に留まる傾向が強かった。古代インドに於いて文字を導入するとすれば，既に簡素な表音文字の体系が考えられたであろうから，知識の普及が急速に進んだ筈である。そうなれば，ことばによる遺産を受け継ぎ，ことばに関する職業的営為の一切を管理していた祭官階級の知的技能独占は貫徹しなかったであろう。祭官階級は，結果的に，文字の導入を行わなかった。ヴェーダ文献については，口伝によることを原則とした。師から弟子へ（事実上，古くから父から子へとなっていた）伝承されてきたが，正しく伝えられる為の工夫が凝らされた（→6.2）。文字による伝承であったならば，古いヴェーダの原典はこれほどの正確さをもって今日まで伝えられることはなかったと思われる。

文献の中心は，祭式用詩句と専門家（ブラーフマナ「婆羅門」）間の議論の集成である。多様な儀礼専門職を統合し，祭官学派が増広，構成した結果を反映している。基本的には「聖」なる祭式空間だけが語られ，民間の祭りや宴会部分は僅かに暗示されるに留まる。祖霊祭などに対する文献の編集も遅れた。

2　ヴェーダ祭式と祭官たち

ヴェーダ文献は，時代的にも，分量や内容の点でも多岐に亘る多くのテキストからなる文献群であるが，整備された大規模な祭式の中で祭官が分担する職掌を基準として，4つの祭官職ごとに，複数の家系に分かれて編集され，伝承された：リグヴェーダを伝承するホートリ祭官は，インドイラン共通時代の主要祭官職の流れを受け継ぎ，整備された祭式では，神々を祭場へ招いたり，献供時に讃える讃歌（リチ）を唱える。サーマヴェーダを伝承するウドゥガートリ祭官はソーマ祭において詠唱（サーマン）を担当する。歌詞は殆どすべてリグヴェーダから取られている。祭式の実際はアドゥヴァリュ祭官が担当する。彼が用いる祝詞はヤジュスといい，ヤジュルヴェーダに纏められている。4ヴェーダという時には，更に治療，調伏，願望成就等の呪法などを内容とするアタルヴァヴェーダが加えられる。この祭官家系には，後にブラフマン（アクセント位置は語末）祭官と呼ばれる，祭式を統括管理する職掌が割り当てられた。

「祭式」に当たる原語はヤジュニャであるが，神々を目的語とする動詞「誉め称える」からの派生語であり，ゾロアスター教典『アヴェスタ』におけるヤスナ「祈り［の書］」と同起源である。ギリシャ語のハギオス「讃えられるべき，聖なる」にも原義が残る。ヴェーダ祭式においても祭式の実現力は「ことば」にあると後々まで意識されていた。「ブラフマン」（アクセント位置は語頭）とはもともとそのような言葉の霊力であり，これを職業とする者がブラーフマナ（アクセント位置は語末，「婆羅門」）である。祭式の効力は何よりもマントラ（『真言』）にある。アドゥヴァリュ祭官も各行作に祝詞（ヤジュス）を添える。

3　シュラウタ祭式とヴェーダの編集，ヤジュルヴェーダ，ブラーフマナ

ヴェーダ文献群の編集整備は，先ず，リグヴェーダが編集され（紀元前1200から，遅くとも1000年頃までに完了，→6.1），その後，他の文献が祭式の整備の進行に伴って編集されていった。

始めに整備された大規模祭式は「シュラウタ祭式」，つまり，「シュルティ（伝承・学習）に基づく祭式」とよばれ，基本的祭火として3ないし5火を必要とする。（「シュルティ」の語は，この意味では，アイタレーヤ・ブラーフマナⅦ，マーナヴァ・シュラウタスートラにはじめて現れる。）覚醒作用をもつ植物ソーマ（イランのハオマ：麻黄）の圧搾を中心としサーマン（詠唱，→2））を伴うソーマ祭，動物犠牲祭，穀物祭に大別される。内容は，太陽・年・季節・月等の巡りの維持，部族・共同体・国の存続と繁栄など，宇宙・環境・社会全体に関わる事柄を中心とする。この祭式群は，実際に行作を担当するアドゥヴァリュ祭官（「道筋を辿る」祭官，→2）の主導により組織されていった。祭式は祭主が主催し，祭主夫妻の参加が必要であった。祭主は大家長，部族長（すなわち王），ないしは重要な祭官（同時に大家長であったであろう）が務めたと思われる。

アドゥヴァリュ祭官の家系は，学派毎に，自身の用いる詩句（マントラ，→2）を祭式別に纏め，さらに，マントラの意味，祭式執行の意義付け等の議論を編集していった。この議論の部分はブラーフマナ（アクセント位置は語頭）と呼ばれる。「ブラーフマナ」の語は，既に文献自身の中で用いられている。そこには，神話や，社会・事物・単語等の由来などが援用され，貴重な資料を提供している。古い学派の文献では，マ

ントラ集成の章と議論（ブラーフマナ）の章とが同じテキストの中に編集されている。マイトラーヤニー，カタ，タイッティリーヤの各サンヒターがそれである。「サンヒター」の語はヴェーダ文献本体には現れず，発音スタイルを意味する語（「続け読み」）であるが，リグヴェーダ，アタルヴァヴェーダ，サーマヴェーダの場合にはマントラ集成を意味すると考えても，事実上差し支えない。より新しい学派では，両者が別の書となっている（ヴァージャサネーイ・サンヒター：：シャタパタ・ブラーフマナ）。この，新しく成立したヴァージャサネーイン派が祭式とその意義付けとに新機軸を打ち出し，後の思想展開に大きな役割を果たした。この派の活動期に直接先行したのが，旧派の中のタイッティリーヤ派で，この学派は「タイッティリーヤ・ブラーフマナ」という「ブラーフマナ」書をもっているが，体裁としては古い「サンヒター」と同じく，マントラの章とブラーフマナの章とを含んでいる。

ヤジュルヴェーダのマントラ（祭式用詩句）はアタルヴァヴェーダと同じ言語層に属し，B.C.1000～800年頃の成立と推定される。ブラーフマナ部分はB.C.800年頃から650年頃に亘るものと考えられる。「ブラーフマナ」と名の付くテキストは，リグヴェーダ，サーマヴェーダの祭官学派でも作られ，時代的にはほぼ同じ時代が推定される。

4　ウパニシャッド

「ブラーフマナ」に続いて，祭式の文脈から離陸した「哲学書」である「ウパニシャッド」（原義はおそらく「ものの背後にあるもの」）が編集された。シャタパタ・ブラーフマナの末尾に収められたブリハッド・アーラニャカ・ウパニシャッド，ジャイミニーヤ・ブラーフマナ・ウパニシャッド（サーマヴェーダ所属），チャーンドーギャ・ウパニシャッド（同）の３書がヴェーダ語で書かれたウパニシャッドである。一般には，「アーラニャカ」がブラーフマナとウパニシャッドとを繋ぐ位置にあるかのように考えられているが，「アーラニャカ」と名の付く文献は，既に真正ヴェーダの姿を示さず，時代的に遅れて成立したと考えるべきである。

5　ヴェーダ学派付属文献群

以上が，ヴェーダ文献の本体を成す文献群である。広義の「ヴェーダ文献」には，さらにヴェーダ学派の付属文献が加わる。それらの中，最も古いのは「シュラウタスートラ」で，上記のシュラウタ祭（→３）の式次第を祭官用に定め教えるものである。「スートラ」とは「糸」の意味で，「手引き，綱要書」を意味する代表的用語である。伝統的に「経」と訳されるが，漢訳仏典から取られたものであろう。次に，「グリヒャスートラ」（「家に関する手引き」）は，シュラウタ祭式に遅れて整備された「グリヒャ祭式」（「家に関する祭式」）の綱要書で，一般家長の一生に伴う儀礼を中心に纏められた。祭式整備と文献編集は，およそゴータマ・ブッダの頃（B.C.400頃中心）と考えられる。これに引き続き，家長の義務，共同体の規範を定めた「ダルマスートラ」（法経）が編集された。前後して，各学派のマントラを正確に発音する為の音韻規則を統一した「プラーティシャーキャ」（「各学派毎の書」，の意，単語に分割した読みからもとの続け読みを復元する規則を中心とする），祭場設営の為の測量を教える「シュルヴァスートラ」（紐の手引き），「ピトリメーダスートラ」（葬礼の手引）などが順次編集・固定されていった。中期のウパニシャッドと称されるものも，このころまでに編集固定された。インドの後の伝統では，シュラウタスートラ，グリヒャスートラ，ダルマスートラ，シュルヴァスートラを「カルパスートラ」（典礼書）と纏めて呼ぶことがある。更に，「ヴェーダーンガ」（ヴェーダ補助学）として，１）シクシャー（発音「教本」），２）ヴィヤーカラナ（文法：語形とその意味の派生法），３）ニルクタ（語源学），４）チャンダス（韻律学），５）ジョーティシャ（天文学）にカルパスートラを加えて列挙する伝統がある。ただし，２）－５）にはヴェーダ学派との関連は事実上見られない。ヴェーダ文献群全体を一覧表として表したものとしては，辻直四郎『インド文明の曙』岩波新書の付録３が便利である。

6　リグヴェーダの原典，伝承，研究，解釈

ヴェーダ文献の伝承の問題を，ここではリグヴェーダの所謂「サンヒター」に絞って見てみたい。リグヴェーダの各詩節はリチ「讃歌」とよばれ，「リグヴェーダ」とは「讃歌のヴェーダ（聖典）」の意味である。カヴィ「見る者」，リシ「荒ぶれる者」，ヴィップ，ヴィプラ「（興奮に）うち震える者」などと呼ばれる往古の詩人たちが「見た」ことばを伝えた歌集である。ヴェーダの詩句（マントラ『真言』）は，正しく発語された時に実現する力（ブラフマン）をもった，文法に適い，「詩人」の伝統に則ったことばである。詩人

を意味する単語から，そのようなことばを「見る」為には，特別の興奮状態が必要とされたことが解る。その為に，詩人（祭官）は，古くは蜜酒（マドゥ）を用い，インドイラン共通時代にはより効力のある植物を圧搾して得た液（ソーマ，イランではアヴェスタ語で「ハオマ」。おそらく麻黄）を用いた。「詩人の伝統」についても，ホメーロスの叙事詩と重なる表現などを中心に，インドヨーロッパ祖語の段階に遡る要素が指摘されるとともに，インドイラン共通時代に遡る要素が確実に見出される。古イラン語で書かれたゾロアスター（ザラトゥシュトラ）教の聖典『アヴェスタ』の原典研究が，リグヴェーダ研究を基盤として為されてきたことは，この事情を傍証する。リグヴェーダの讃歌の理念的中核部分には，アフガーニスターンあたりの地理を背景とした，移動（遊牧）を中心とし，定住期を交えた生活が据えられている。掠奪や植民活動も正当な経済活動と見なされている。リグヴェーダの讃歌は，このような，カーブルを越えてインドに入る前の生活に於いて，祭官詩人家系の祖先たちが作った讃歌の伝統の上に成り立っている。リグヴェーダの編集自体は，インドの地，インダス川上流域で為されたことは確実であり，その時点で固定された為，現存する作品は，実際には後の詩人たちが伝承を基に模倣したものと考えて良い。編集時，またはそれに先だつこと遠くない時代に生きた詩人たちは，同時に，新しい環境と必要とに応じ，伝統的詩作外にあった主題をも利用して詩作を行った。要するに，リグヴェーダ讃歌は，往古の詩人が「見た」真正の讃歌と，後の詩人が工夫した独創による讃歌との，両極の間に位置している。

6.1　編集　　現存リグヴェーダは10巻から成り，計1017讃歌が収められている。ここに言う讃歌とはスークタ「よく語られたもの」を便宜的に訳したもので，各讃歌は3～58の詩節（リチ，この語が元々「讃歌」を意味する）から成る。各詩節は詩行（パーダ「足，すなわち1／4」，ギリシャ語のpousに当たる）からなり，標準的な詩節は8音節×3行ないし4行，11ないし12音節×4行などである。リグヴェーダ全体では，ローマ字による刊本で923頁になる。

編集が機械的な方針の下に行われたことは，Bergaigneの1886年，1887年の論文と，更にこれを考慮に入れたOldenberg, Prolegomena (1888) pp.191-270により明らかにされた。リグヴェーダの中心を形成するのはⅡ巻－Ⅶ巻である。その各巻は各家系に伝えられた「家集」であり，巻の順序は，讃歌数の少ない家集から多い家集へと並べられている。一つの家集の中では，先ず火神アグニの讃歌，ついでインドラの讃歌，その後は捧げられた讃歌の数が多い神への讃歌から順に収録されている。同じ神への讃歌の中では詩節数の多いものから，同数の場合には，韻律上長い音節をもつ讃歌から並べられる。この方針はⅡ巻に直接先だつⅠ51－191にも当てはまり，ここには少ない讃歌を伝える家系の歌が収録されている。この，Ⅰ51－Ⅶの「家集部分」を中核として，この前をカヌヴァ家の分家にあたる家系の歌が，後をカヌヴァ家の歌が，「家集部分」とは一部異なった方針で並べられて挟み，Ⅰ－Ⅷが纏められている。このことから，編集にカヌヴァ家が携わったことが推定される。また，カヌヴァ系の歌にはソーマ祭に用いられる形式を示す歌が多い。このようにして成立したⅠ－Ⅷに，ソーマ祭でウドゥガートリ祭官が詠唱用に用いる目的で集められた，ソーマが濾過される経過を称える歌が，各家系の歌から引き抜かれて，讃歌数を多くもつ韻律のグループから順に，同じ韻律のグループの中では詩節数の多いものから順に並べられて，Ⅸ巻として付された。ウドゥガートリ祭官とそのグループがソーマ祭で用いる為に編集されたサーマヴェーダ*~~にこれらの歌が収録されていないことは，サーマヴェーダがリグヴェーダを前提としており，収録の必要がなかったものと考えれば説明がつく。また，~~ヴェーダ文献の編集とヴェーダ祭式の整備とが同時進行していた事情が，既にリグヴェーダの段階に遡ることが傍証される。更に，以上に収録されなかった様々な内容の歌が，補遺として，伝統的な作者名毎に讃歌数の多いものから纏められて，Ⅹ巻として付加された。（Ⅰ巻とⅩ巻とが，ともに191讃歌を含むことは偶然とは考えられず，背景に何らかの編集意図が推測される。）以上がリグヴェーダ全10巻であるが，Ⅰ－Ⅸ巻には，さらに，若干の讃歌が後から挿入されている。そのことは編集方針からの逸脱によっても確かめられる。言語の上では，第Ⅹ巻に比較的新しい現象が見られる他には，本体部分は全体として新旧の差を示さない。

*訂正（「古代インドの祭式概観」p.64参照）：の集成はこれらの歌を基にしている。

現存のサーマヴェーダ，ヤジュルヴェーダ，アタルヴァヴェーダは，既に編集固定されたリグヴェーダを前提としていると考えられる点があることからも，上記のリグヴェーダ編集はかなり古い時代に遡ると推定される。我々は相対的な案配以外に何一つ判断基準をもたないが，本報告者は前1200年頃（遅くとも1000年以前）とする説を最も無難な年代であると考えている。